羅生門

楠山正雄

一

頼光（らいこう）が大江山（おおえやま）の鬼（おに）を退治（たいじ）してから、これはその後（のち）のお話（はなし）です。

こんどは京都（きょうと）の羅生門（らしょうもん）に毎晩鬼（まいばんおに）が出るといううわさが立（た）ちました。なんでも通（とお）りかかるものをつかまえては食（た）べるという評判（ひょうばん）でした。

春（はる）の雨（あめ）のしとしとと降（ふ）る晩（ばん）のことでした。平井保昌（ひらいのほうしょう）と四天王（てんのう）が頼光（らいこう）のお屋敷（やしき）に集（あつ）まって、お酒（さけ）を飲（の）んでいました。みんないろいろおもしろい話（はなし）をしているうちに、ふと保昌（ほうしょう）が、

「このごろ羅生門(らしょうもん)に鬼(おに)が出るそうだ。」
といい出(だ)しました。すると貞光(さだみつ)も、
「おれもそんなうわさをきいた。」
といいました。
「それはほんとうか。」
と季武(すえたけ)と公時(きんとき)が目を丸(まる)くしました。綱(つな)は一人(ひとり)笑(わら)って、
「ばかな。鬼(おに)は大江山(おおえやま)で退治(たいじ)てしまったばかりだ。そんなにいくつも鬼(おに)が出てたまるものか。」
といいました。貞光(さだみつ)はやっきとなって、
「じゃあ、ほんとうに出たらどうする。」
とせめかけました。

「何(なに)ひと、出たらおれが退治(たいじ)てやるまでさ。」

と綱(つな)はへいきな顔(かお)をしていいました。貞光(さだみつ)と季武(すえたけ)と公時(きんとき)はいっしょになって、

「よし、きさまこれからすぐ退治(たいじ)に行け。」

といいました。

保昌(ほうしょう)はにやにや笑(わら)っていました。

綱(つな)は、その時(とき)

「よしよし、行くとも。」

というなり、さっそく鎧(よろい)を着(き)たり、兜(かぶと)をかぶったり、太刀(たち)をはいたり、ずんずん支度(したく)をはじめました。

綱(つな)も、外(ほか)の三人(にん)もみんなお酒(さけ)に酔(よ)っていました。

貞光は、その時あざ笑いながら、

「おい、ただ行ったって、何かしょうこがなければわからないぞ。」

といいました。綱は、

「じゃあ、これを羅生門の前に立ててくる。」

といって、大きな高札を抱えて、馬に乗って出かけました。

真っ暗な中を雨にぬれながら、綱は羅生門の前に来ました。そして門の前を行ったり戻ったり、しばらくの間鬼の出てくるのを待っていました。けれどいつまでたっても、鬼らしいものは出て来ませんでした。

綱はひとりで笑って、

「はッは、鬼め、こわくなったかな。やはり鬼が出るというのはうそなのだろう。まあ、せっかく来たものだから、高札だけでも立てて帰ろう。」

と独り言をいいながら、門の前に高札を立てました。

「やれやれ、つまらない目にあった。」

綱はぶつぶついいながら、そのまま帰って行こうとしました。あいにく雨が強くなって、風が出てきました。真っ暗な中で綱は、しきりに馬を急がせました。

ふと綱の乗っていた馬がぶるぶると身ぶるいをしました。そのとたん、ずしんと何か重たいものが、後ろ

の鞍（くら）の上に落（お）ちたように思（おも）いました。おやと思（おも）って、綱（つな）がそっとふり向（む）くと、なんだかざらざらした堅（かた）いものが顔（かお）にさわりました。それといっしょにいきなり後（うし）ろから襟首（えりくび）をつとつかまれました。

「とうとう出た。」

綱（つな）はこう思（おも）って、襟首（えりくび）を押（お）さえられたまま鬼（おに）の腕（うで）をつかまえて、

「ふん、きさまが羅生門（らしょうもん）の鬼（おに）か。」

といいました。

「うん、おれは愛宕山（あたごやま）の茨木童子（いばらぎどうじ）だ。毎晩（まいばん）ここへ出て人をとるのだ。」

と、鬼(おに)はいうなり綱(つな)の襟首(えりくび)をもって空(そら)の上に引(ひ)き上(あ)げました。

引(ひ)き上(あ)げられながら綱(つな)はあわてず刀(かたな)を抜(ぬ)いて、横(よこ)なぐりに鬼(おに)の腕(うで)を切(き)りはらいました。その時(とき)くらやみの中で「ううん。」となる声(こえ)がしました。そのとたん綱(つな)はどさりと羅生門(らしょうもん)の屋根(やね)の上に落(お)とされました。

その時(とき)はるかな黒雲(くろくも)の中で、

「腕(うで)は七日(なのか)の間(あいだ) 預(あず)けておくぞ。」

と鬼(おに)はいって、逃(に)げて行きました。

綱(つな)はそろそろ屋根(やね)をおりて、その時(とき)までもしっかり襟首(えりくび)をつかんでいた鬼(おに)の腕(うで)を引(ひ)きはなして、それを

持って、みんなのお酒を飲んでいる所へ帰って行きました。

帰って来ると、みんなは待ちかまえていて、綱をとりまきました。そして明かりの下へ集まって鬼の腕をみました。腕は赤さびのした鉄のように堅くって、銀のような毛が一面にはえていました。

みんなは綱の武勇をほめて、また新しくお酒を飲みはじめました。

二

「七日の間腕を預けておくぞ。」

こういい残した鬼の言葉を綱は忘れずにいました。それで万一取り返されない用心に、綱は腕を丈夫な箱の中に入れて、門の外に、

「ものいみ」

と書いて張り出して、ぴったり門を閉めて、お経をよんでいました。

六日の間は何事もありませんでした。七日めの夕方にことことと門をたたくものがありました。綱の家来が門のすきまからのぞいてみますと、白髪のおばあさんが、杖をついて、笠をもって、門の外に立って

いました。家来（けらい）が、

「あなたはどなたです。」

と聞（き）きますと、おばあさんは、

「綱（つな）のおばが、摂津（せっつ）の国渡辺（くにわたなべ）からわざわざたずねて来（き）ました。」

といいました。

家来（けらい）は　気（き）の毒（どく）そうに、

「それはあいにくでございました。主人（しゅじん）はものいみでございまして、今晩一晩（こんばんひとばん）立（た）つまでは、どなたにもお会（あ）いになりません。」

といいました。するとおばあさんは悲（かな）しそうな声（こえ）で、

「綱は小さい時母に別れたので、母親の代わりにわたしがあの子を育ててやったのです。それが今はえらい侍になったといって、せっかく遠方からたずねて来ても会ってはくれない。このごろはめっきり年をとって、こんどまた会おうといっても、それまで生きていられるかおぼつかない。ああ、ざんねんなことだ。」

といいながら、とぼとぼ帰って行こうとしました。

綱は奥でおばさんのいうことをすっかり聞いていました。聞いているうちに気の毒になって、どうしても門を開けてやらずにはいられないような気がしました。

それで自分が出て行って、門を開けてやって、

「よくいらっしゃいました。」

といって、奥へ通しました。

おばさんはうれしそうに入って来て、久し振りのあいさつがすむと、

「さっき、ものいみで門をあけないといったが、あれはどういうわけなのだね。」

と聞きました。

綱は鬼のことをくわしく話しました。おばさんはだんだんひざを乗り出しながら聞いていましたが、

「まあ、不思議なこともあるものだね。だがわたしの育てた子がそんなえらい手柄をしたかと思うと、わた

しまでうれしいとおもうよ。ついでにその鬼の腕とい
うのを見たいものだね。」
といいました。
綱は気の毒そうな顔をして、鬼のいい残した言葉が
あるので、今日七日のものいみが明けるまでは、だれ
にも見せることができないというわけを、ていねいに
いって断りました。するとおばさんは悲しそうな顔
をして、
「まあ、よくよく縁がないのだね。なにしろ年を取っ
て生い先の短い体だからね。しかたがない、あきら
めましょう。」

と、しおれ返（かえ）っていいました。

その様子（ようす）をみると、綱（つな）はまたどうしても鬼（おに）の腕（うで）を出（だ）して見（み）せなければならないような気（き）になって、

「ではせっかくだから、ちょっとお目にかけましょう。」

といって、箱（はこ）をおばさんの前（まえ）に持（も）ち出（だ）して、ふたをあけました。

「どれ、どれ。」

とおばさんはいって、つとそばによりました。そしてしばらくじっと箱（はこ）の中をのぞき込（こ）みながら、

「まあ、これが鬼（おに）の腕（うで）かい。」

といって、いきなり左の腕を伸ばして、腕を取りました。

綱がはっと思う間に、おばさんはみるみる鬼の姿になって、空に飛び上がりました。そして綱が刀を取って追いかけるひまに、破風をけ破って、はるかの雲の中に逃げて行きました。

綱はくやしがって、いつまでも空をにらめつけていました。

でも鬼はそれなりもうふっつりと姿を現しませんでした。都の中でも鬼のうわさはぱったり止みました。

底本：「日本の英雄伝説」講談社学術文庫、講談社
1983（昭和58）年6月10日第1刷発行
※「家来は　気の毒そうに」の空白と、「おばあさん」「おばさん」の混用は底本のままです。
入力：鈴木厚司
校正：大久保ゆう
2003年9月29日作成
青空文庫作成ファイル：
このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫（http://www.aozora.gr.jp/）で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんで

す。